



シリーズ  
《北海道のポーランド人から》

# 誓います / Przysięgam

～日本とポーランドの結婚式について～ (1)



アグニェシュカ・ポヒワ

9月15日に結婚1年記念日を迎えました。結婚式の準備とその当日の思い出がまだフレッシュである一方、一年という間をおくと少し客観的に考えることができるようになった気がします。それがきっかけで、今回日本とポーランドにおける結婚式をさまざまな面から比べてみようと思いました。

長年日本に住んでいる私ですが、日本人の相手と結婚することになったので、やはり結婚式をあげるとしたら日本であげるのではと、予想していました。結婚式は、日本とポーランドという二つの違う世界がぶつかるテンションの高いイベントですから、どのように私たち二人の個性と私たちが代表する国の個性を上手に表せるのかが最大の課題とチャレンジとなりました。

そもそも日本とポーランドでは結婚はどのようにできるのか？結婚の準備はどこがポイントなのか？結婚式の当日の流れはどう違うのか？また両国の伝統的な結婚式は現在どう変わっているのか？という質問に答えてみたいと思います。

## 日本とポーランドにおける婚姻の違い

まずは、両国の法律から見た、婚姻が成立する場合を簡単にまとめましょう。

日本では役所で事前に記入した婚姻届を提出することで法律上、夫婦が認められます。好きな時に記入し、一人でも好きな時に提出できるという非常に便利で簡単な(外国人の場合を除いて)手続きですが、その一方、重要度の割には、ただ紙を渡して済むという、思い出にもならない、感情のこもっていない手続きでもあるという意見を外国人からよく聞くことがあります。

ではポーランドの場合はどうでしょうか？

日本より手続きが複雑ですが、次のようにお祝いすることになります。書類を渡すだけでは結婚はできず、シヴィル・ウェディングという式が必要となります。これ



Agnieszka Pochyla

1983年ポーランド・シロンスク県ヤストシェンビェ・ズドレイ(Jastrzębie-Zdrój)生まれ。ポズナニ大学新言語学部卒(日本学修士)。日本政府奨学金を受け北海道大学に2回留学した。現在フリーカメラマンとして活動中。



は簡単に言うと、宗教的な要素を抜いた結婚式です。普通は市役所に付属する登記所の結婚会場で行われます。家族と友達が集まり、新郎新婦が役員の前で誓いの言葉を交わし、証人と一緒に書類にサインをし、最後に役員が結婚を認めます。

以前は役所で小規模なシヴィル・ウェディングを済ませ、教会で立派なウェディングを行うというパターンが一般だったのですが、1998年から法律の改正によりコンコルダート・ウェディングという混合結婚式が可能になりました。教会の挙式が始まる直前に、役所からもらった書類に新郎新婦、その証人と神父がサインします。法律上も宗教上も結婚が認められ、さらに一回で済ませるので、今はコンコルダート・ウェディングが広く行われています。

また、最近では無宗教、経済上の理由などでシヴィル・ウェディングのみを選ぶカップルが増えてきています。(つづく)



《北海道のポーランド人から》

# 誓います / Przysięgam

～日本とポーランドの結婚式について～ (2)

アグニェシュカ・ポヒワ

前回は日本とポーランドの法律上で見た婚姻の成立の相違についてお話ししました。今回は両国の結婚式、つまり法律と関係のない儀式の種類を比べてみましょう。

日本の結婚式を見ると神前式、キリスト教式、人前式という3つの種類の式が一般的に行われていますが、神前式は日本の宗教と伝統から由来し、キリスト教式はカトリック・プロテスタントの宗教と、それに伴う西洋(主にアメリカ合衆国)の伝統が由来です。一方、人前式は宗教の要素を抜いたキリスト教式に似ており、自由自在のスタイルで行われています。式を挙げる場所も様々で、神社、レストラン、ホテル、教会風結婚式場などがあります。

面白いことに、日本では神前式とキリスト教式を希望するカップルはその宗教の信者でなければならないという条件は全く存在しません。なぜかというと、現在の日本社会では一般的に、どの宗教・宗派を信仰しているかはそれほど重視されず、また個々人も自らの信仰を殊更に意識することが少ないためです。一つの宗教を信じるより、人生の中のイベントや年中行事によって宗教を選ぶという日本独特の考え方があり、結婚式も宗教的な儀式というより、風習・伝統に当たるものになっています。以上から見ると、たとえキリスト教式を選んだとしても、本物の教会で本物の神父・牧師がいる本物の儀式ではなくても、誰も(信者を除いて)気にならないのです。

最後に人前式に触れると、神父・牧師のいないキリスト教式風に行われる場合がほとんどですが、特定宗教とは無関係であるため、ほかの宗教また

は伝統から好きなアイデアをいいとこ取りして、挙式を独創的にカスタマイズできます。日本のように結婚式のスタイルを好きに選べる国はほかにあるのだろうか、たまに不思議に思います。

では、ポーランドの結婚式には、どんなものがあるのでしょうか？

残念ながら、日本ほどバリエーションはないのです。ポーランドの国民の約 95%がカトリック教徒で、そのうち 75%が敬虔な信者であるため、ポーランド人の価値観や日常生活にはカトリックの信仰が根付いています。結婚式も一般的に教会で行われるカトリック式がほとんどで、進行は決まっておき、自由にスタイルを選ぶことはあまりできません。さらに結婚の準備としてさまざまな手続きと宗教的な儀式を済ませなければならないので、日本の教会結婚式とポーランドの教会結婚式とは、表面は似ていても裏はまったく別のもので、日本の「偽神父」と「偽教会」を強く批判する人も珍しくありません。

無宗教、また教会の挙式を望まないカップルは、役所でシヴィル・ウェディングをあげるのが一般的です。人前式というコンセプトはいまだにあまり知られていないようです。かならず役員の前または神父の前で結婚を誓うことになります。

以上、日本とポーランドの結婚式の挙式の種類をまとめてみました。

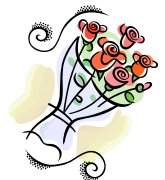
今回は、両国の実際の式の流れに移る前に、結婚式のための準備について紹介したいと思います。

(つづく)



## Agnieszka Pochyla

1983 年ポーランド・シロンスク県ヤストシェンビェ・ズドレイ (Jastrzębie-Zdrój) 生まれ。ボズナニ大学新言語学部卒 (日本学修士)。日本政府奨学金を受け北海道大学に2回留学した。現在フリーカメラマンとして活動中。





《北海道のポーランド人から》

## 誓います // Przysięgam

～日本とポーランドの結婚式について～ (3)

アグニェシュカ・ポヒワ



前回は、主に宗教がポーランドと日本の結婚式にどのように影響したか、また式の種類についてお話ししました。次は、両国での結婚式へ至るまでについて具体的に比べてみたいと思います。会場探し、衣装選び、カメラマン探し等々はどのように違うのでしょうか。

### 式の日取りとゲスト

まず、結婚式の日取りの決め方からスタートしましょう。両国とも一般的に結婚式が一番多い曜日は土曜日で季節は夏です。日本もポーランドも、会場の人気によって数ヵ月から1年という待ち期間があるので、日付決定は会場探しと同時に行います。

日本の場合は、日取りを決めるときに六曜カレンダーが重要になります。仏滅は絶対に避け、なるべく大安や友引の日に式を挙げるといふ風習があるからです。新郎新婦本人は暦をまったく気にしなくても、その両親や親戚に強く信じる人がいる場合は、日付選びが難しくなります。

ポーランドには、名前に“r”が入っていない月(例:maj=5月)に結婚しないほうが良いという面白い迷信がありますが、現代社会ではそれを守る人はいないようです。日取りは本人たちと(ある程度)ゲストの都合に合わせて選びます。

ゲストといえば、日本では、親戚と友人に加えて職場の同僚と上司を招待することが多いですが、ポーランドではそれは考えられません。結婚というのはプライベートなイベントで、仕事とは無関係だからです。また、ポーランドでは、新郎と新婦がそれぞれ一人の証人を選ぶのが常識です。兄弟または親友をお願いするのが一般的ですが、証人の仕事は正式書類に署名するだけではなく、結婚準備を手伝い、余興を考え、結婚当日まで二人の総合付き添い役を務める大切な助っ人です。

### ウェディングの準備——プラン vs. ロコミ

日取りとゲストを決めてからの準備は、ポーランドと日本では進め方がだいぶ違っていきます。両国

の結婚準備の特徴を一言でいうと、日本は「プラン」、ポーランドは「ロコミ」というようにまとめることができます。

前回お話したとおり、日本ではホテルウェディングがもっとも一般的です。気になるホテルがあれば、そのウェディング担当に相談していくつかのウェディングプランを紹介してもらいます。基本プランには会場、装飾、食事だけではなく、衣装、写真・動画撮影、エンターテイメントなどが含まれており、すべてがパッケージになっています。さらに自分の予算に応じて衣装や食事をもっと豪華にする、余興を増やすというアップグレードや追加オプションも付けられます。チャペルと披露宴会場から衣装スタジオ、写真スタジオまで、必要なサービスのほぼすべてが一ヵ所に備えられているため、ウェディングの計画は効率的に立てることができます。

その反面、自分らしく結婚式を組み立てることはほぼ不可能で、自分のイメージしたウェディングを仕方なくプランに合わせる必要があるのは大きな減点になります。ほとんどのホテルは、そこで契約を組んでいるサービス会社を利用させているため、例えば自分で買ったお気に入りのドレスを着る、知り合いのカメラマンに撮影をお願いするなど、自由な行動は制限されてしまいます。それが許されている会場を見つけたとしても持込み料を払うことを要求される場合が多いです。

ところが、ポーランドでは式は教会ですが、パーティーはホテルというより、レストランまたは部屋付き多目的式場を使うことが多いです。会場予約と一緒に食事プランと装飾プランを決められるが、それ以外の物をすべて自分で探して決める必要があります。そこでロコミが重要になってきます。会場担当に聞けば、おすすめの花屋やバス会社、最近結婚した友達に聞けば、おすすめの美容サロンを教えてください。つまり、周りの人に聞く、またはインターネットで検索するのが主流です。そのプラス面とマイナス面については次回もっと詳しくご紹介します。

(Agnieszka Pochyla)